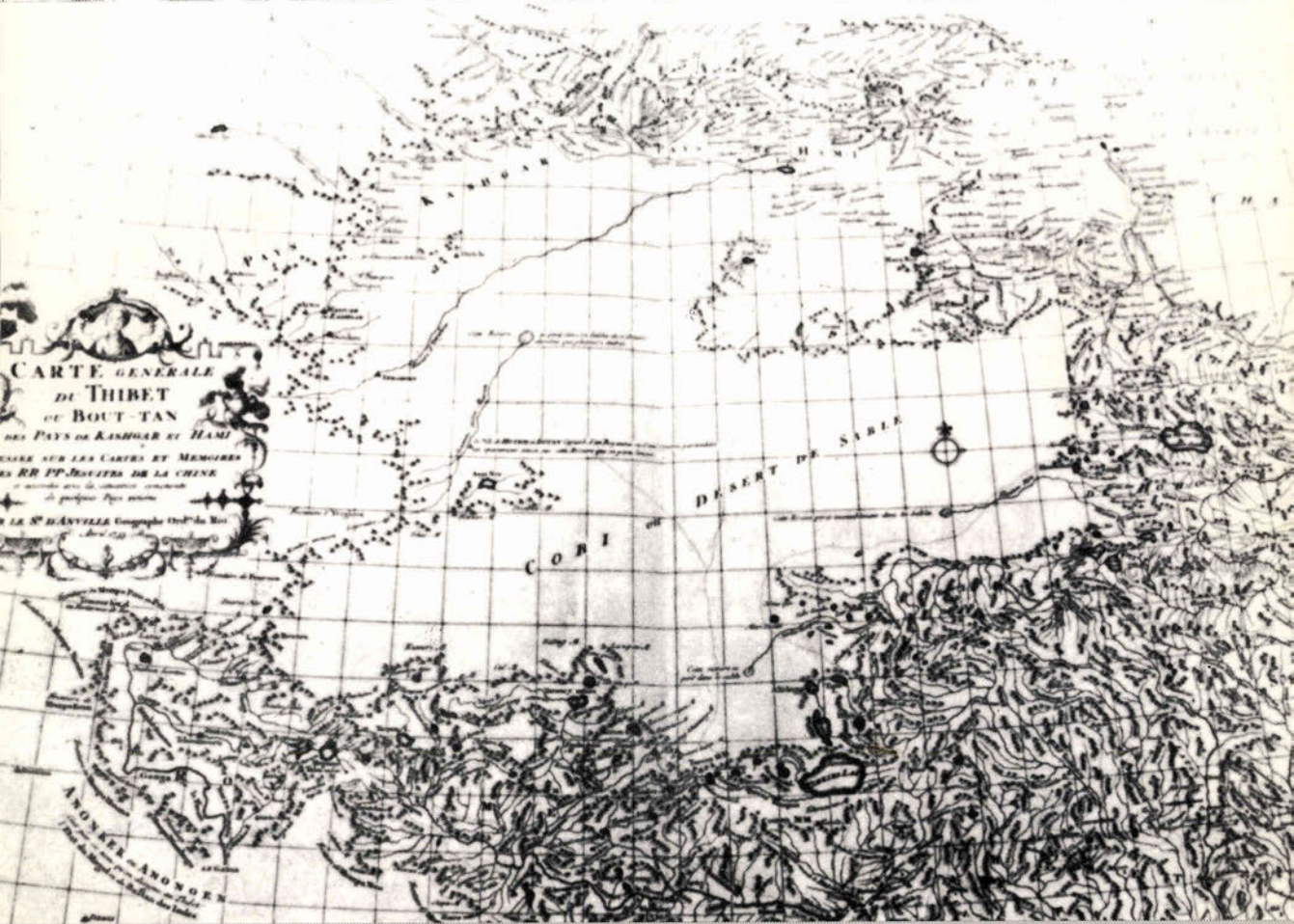


ヒマラヤ

No.110

●特集 ヒマラヤ登山の経費



1981 JAN.

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1981年ヒマラヤ登山学校隊員募集

— ナンダ・カート (6611m) — 許可取得!!

H A Jでは1人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来四度にわたって延べ90名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は確かな技術と経験を有する指導者(インストラクター)の統活のもとに、安全確実を第一にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の修得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしており、単なるバック登山とは全く異なっています。

81年度は、ガルワールヒマラヤの名峰ナンダ・カート(6,611m)にて実施する予定であります。ふるって御参加下さい。

実施要項

- 目的 ①ナンダ・カート(6,611m)登頂
②ヒマラヤ登山の基礎修得
- 時期 1981年9月13日～10月12日
29日間(BC以上の登山期間15日)
- 負担金 69万円
- 定員 20名(申込順)
インストラクター4名(ドクター含む)
- 申込み 1980年12月末までに下記宛申込みこと(資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会
TEL 03-367-8521

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

ダンビルの地図帳より
「シナ領ダッタン全図」

【堀内立三氏所蔵】

ヒマラヤ No.110

1. ヒマラヤ放談 ————— 吉尾 弘
4. ヒマラヤニュース<地域・トピックス・インフォメーション・新刊>
7. 特集 ヒマラヤ登山の経費 ————— 編集部
12. 日本ヒマラヤ会議報告
13. 女だけ、小さな会のヒマラヤ遠征 ————— 女子雪氷倶楽部
16. 連載 遠征学入門⑳ ————— 清水 澄
18. ヒマラヤ閑話㉔ ————— 水野 勉
20. トレッキング許可で登れる山④<ガンジャラ・チュリ> — N. W. A. F.
23. 寸感、事務局日誌

ヒマラヤ放談

吉尾 弘

記録は塗りかえられるためにある。が、あらゆる記録は、歴史という土台の上に成り立つもので、歴史を抜きにして記録は語れない。かつて、日本の冬期初登攀の黄金時代を築きあげた吉尾弘氏は今、ヒマラヤを舞台にさっ爽とカムバックしてきた。パビールの初登頂、チョー・オユーへの挑戦、そしてさらに意欲的に8,000メートル峰を語る氏の裏側には、仲間を思うあたたかい愛情と、組織の育成に対する真摯な姿があった。



●初登攀 …… 閉ざされた中の価値感

—— 今、おいくつですか？

吉尾 43なんです。

—— お若いですねえ。この前のパビールでは一番強かったとか。

吉尾 いやいや、そんなことないです。

—— ここ最近俄然ヒマラヤづいてきた感じが……。

吉尾 ええ、やはり以前から行きたい行きたいと思いつけてきましたから。

—— 山は10代の頃から始められたんでしょう？

吉尾 ええ、高校時代からです。高校2年の時に朝霧山岳会に入った。八ヶ岳を縦走した時に南北アルプスがすごくステキに見えたんです。で、行ってみたいなあと思っていた矢先、朝霧が夏の合宿を剣でやるというので、まあ剣に行きたくて入ったようなもんです。

—— 入ったと思ったら、アッという間に頭角をあらわしてきた。

吉尾 いや、そんなことないです。ただ当時はちょっと異常だったんだなあ。とにかく登ってないと常に不安に追いかけるような気がしていた。どこそこに未登の壁があるとかっていうと、自分に登れるだろうかどうだろうか、もう登ってみたいことには、何か自分自身が不安でしうがなくて、それで矢も盾もたまらず出かけていっ

た。

—— のめり込んでたんですね。で、冬の滝沢がまだ20前^{はたち}なんですね。

吉尾 19才でした。

—— それから延々と初登攀がつづく。日本の冬期初登攀の黄金時代ですね。あの時代っていうのは、私は本で読んだり、先輩から聞いたりした知識しかないんですが、歴史的価値もさることながら、ものすごくロマンチックな時代だったような気がするんです。で、その時代の主役の一人だった吉尾さん御自身が今、当手を振り返ってみるとどんなふうにお感じになります？

吉尾 うーん。でも僕は今のほうがずっといい時代だと思いますよ。当時は外貨が自由化されていなかったから、海外に行きたくても行けなかった。それでしょうがなしに日本の山ばかり登っていた。今思うと20年遅く生まれればよかったと思いますよ(笑)。

—— 国内の山にもものすごくのめり込んで、しかもトップクラスの業績をあげていながら、やはり常に海外のことを考えておられたわけですね。

吉尾 ヘルマン・ブルに対する憧れがものすごくあった。彼の影響で岩を登っていたようなものです。だから海外の山には行きたかったですね。常に夢見ていた。だけど実現できない。実現できないからそれに変るものを国内でと考えると、屏風から前穂東壁右岩稜～Dフェース～西穂とつないでみたりした。

—— 当時、非常な衝撃となったあの登攀も、吉尾さんにとっては一種の代替行為だったんですね。

吉尾 まあそうですね。あの名古屋の加藤幸彦さんなんて羨ましくてしょうがなかった。僕なんかめげてましたよ。だから今の時代ってすばらしい時代だなあって思う。

—— 私ぐらいの世代って、そういう意味では恵まれてますから、一種の“ないものねだり”をしているのかもしれないけど、あの時代、つまり60年安保闘争の前後の頃ってというのは、時代そのものにロマンがあって、山の世界にもそれが色濃く投影していたような気がするんですが……。

吉尾 うーん。なんていうかな、置かれた状況の中で仲間たちで価値感を作っていくように思っているように思う。で、それはそれなりに楽しいことだし、その価値感を追求して一種のマニアみたいになっていく人もいます。その作りだした価値感がつまり冬期初登攀なわけで、夢が閉ざされていても、ロマンがあったと言えば確かにそうなのかもしれない。でも、やっぱり閉ざされている部分があるということは、それだけで不幸なことだと思う。僕はやっぱり今の時代のほうがいいなあ。

—— なるほど、時代に生きた人のホンネですね。確かにそれが本当なんでしょうね。

●ヒマラヤは決定的に違う

—— 65年の夏ですか、ヨーロッパに行かれたのは。

吉尾 そうです。ただあの時は痔になっちゃってね。不本意な結果しか出せなかった。7月いっぱい入院したりして……。

—— ドリュの北壁に登られてますね。

吉尾 ええ、あとヴェッターホルンの北壁とか。

—— で、そのあとヒマラヤの活動が始まるまでの間、ちょっと空白があるんですね。

吉尾 子供が4人できましてね。生活に追われて、やりたいこともあまりできなかった。73年頃に一度ヒマチャールの山に行ってますがね。

—— そのあとがバビールになるんですね。

吉尾 そうです。

—— 若い頃にもものすごく精力的に登って、そ

れで中年になって遠ざかると、もうそのまま行かなくなっちゃうケースが多いですよ。吉尾さんの場合、見事にカムバックしてきた、何故でしょうかね。

吉尾 ひとつにはヒマラヤに対する夢がずーっとあったということですね。ヨーロッパに行っても日本の山にいても、いつもヒマラヤに行きたいと思っていた。ただ僕の場合登山にいたから、ネパール、カラコルムがシャットアウトされていて、インドじゃ今ひとつ意欲がわかないみたいなのところもあってね。だから悶悶としていたんですよ。

—— ということは、つまり遠ざかっていなかったんですね。さっき空白と云いましたが、表に出るものがなかっただけで、実際はずっと継続してきているわけですね。

吉尾 ええ、記録からは遠ざかっていたけど、山は登っていた。

—— やはりアルプスよりもヒマラヤですか。

吉尾 アルプスの場合、日本の山と質的にそう違わないと思うんだ。山麓が違うだけで、取り付いてしまうと日本の冬山と似たようなものです。だけどヒマラヤは決定的に違う。ひとつには高度という絶対的な相違があるし、その他あらゆる意味で異質な登山だと思います。表象媒体という言葉がありますね。絵描きにとっての表象媒体はキャンバスですが、山ヤにとってのそれは山っていうか、自然と人間です。で、人間のつながりも自然の厳しさも、あらゆる面でステキなのはヒマラヤにつきると思うんです。

●キャリアよりも取組みの姿整

—— 来年のチョー・オユーはどんなふうな登山にするおつもりなんですか？

吉尾 29人行くんだけど、言ってみれば登山という組織の全国規模の宿泊みたいな遠征にしようかと思っている。とにかく8,000の経験者を育成するということです。ルートはゴジュンバ氷河から入って東面を登ります。シェルバは使わず、自分の腕と肩と足で登らせるつもりです。行きたい人間は皆つれていきますから、実力的にはかなりのアンバランスも出てくるでしょう。

—— リーダーにとってはむづかしい隊ですね。

吉尾 ええ、ちょっとむづかしい面もあると思います。10人ぐらいである程度揃ったチームなら僕が隊長をやろうと思うんだけど、今度のような隊はちょっと考えてしまうんで、それで小松さんに隊長をやってもらうことにしたんです。

—— 未解禁峰ですが、許可のほうは大丈夫なんでしょうか？

吉尾 ええ、許可は取れてます。

—— 成功したらまた次があるんでしょうね。

吉尾 僕個人としては8,000メートル峰の縦走をやりたい。

—— 吉尾さんはこれまでいろんな組織に関係してこられたと思うんですが、山をやっていくうえで、どんな組織が理想というか好みなんですか？

吉尾 僕はね、今までいい仲間にも何人も死なれてるんです。林与四郎君とか、他にも多勢……。だから少しでも遭難を減らすように努力していきたいという考えがものすごく切実なものとしてあるんです。ヒマラヤもそういう観点でとらえてやっていきたいと思っています、その点、労山という団体の活動は、割と僕の考えにマッチしています。こういう広域的な団体の中で人と交わり、あるいは若い人を指導していくほうが、狭い会の中で指導するよりも僕の理念というか心情にあうと考えるわけです。

—— チョー・オニュー隊もそういう考えで貫かれているんですね。

吉尾 ええ、そういうふうには考えています。ただこういう考えだと登る楽しさは半減するかもしれない。でも別の楽しさがある。パビールで初めて出会った若い人が遠征の後、今度は自分がリーダーになってやっている姿なんか見ると、楽しくなりますよ。

—— 理想的な指導者なんですね。

吉尾 いや、それはどうかかわからないけど(笑)。

—— R C C時代はどんな考えでやっておられたんですか？

吉尾 あの頃は知識を吸収したかったですね。古川さんとか奥山さんみたいなステキな先輩たちもいたし……。ひとつの会の中だけでやってたんじゃ、そういう先輩たちに対して申し訳ないよう

な気がしてね。

—— 今、若い人に望むことがあるとすれば、どんなことでしょうか？

吉尾 あらゆることに積極的に取り組んで欲しいですね。

—— ということは登ることだけじゃなくて、組織の仕事とか、そういうことですか？

吉尾 ええ、労山にいます、若い人でも仕事量は多いですよ。いろいろなことをやらなければならない。で、そういうめんどろなことに積極的に取り組む人のほうが、山へ行ってもプラスアルファの力を発揮すると思います。特にヒマラヤの場合は、ヨーロッパでどこそこの壁を登ったとかいうようなキャリアはあんまり関係ないと僕は思ってます。これは実際に今までそういう結果が出ています。

—— 若いうちはとにかく苦勞せよということですね。

吉尾 そうですね。

—— 特に広域チームの場合、事前に一緒に仕事をしないで、いきなり山だけ行ったりすると、遠征が終るとハイ・サヨナラっていうことになってちゃって仲間としては残らないですね。

吉尾 山は、いい仲間にも恵まれれないといい思い出が残らない。やっぱり人間性と知性があってあらゆることに積極的に取り組むような仲間がステキだなあ。

—— いいお話をありがとうございました。チョー・オニューの成功を祈っています。

(インタビュー構成：角田不二)

ソ連アルピニズムクラブ事務局長来日 //

このほどソ連アルピニズムクラブの事務局長モナワティルスキー氏が来日するため、H A Jでは日本山岳会、京都府山岳連盟と共催し、下記のとおり氏を囲んでの集会を企画した。ふるって御参加下さい。パミールの映画も用意しています。 ※参加は無料です。

●日時 12月16日(火)PM 7:00~9:00

●場所 京都府農協会館(京都市南区東9条西山王町1)

トピックス

日本ブータン友好協会設立へ

さる11月1日、東京津村順天堂会議室において、日本ブータン友好協会（仮称）の設立準備委員会が開催され、同協会設立についての検討が行なわれた。準備委員会はそのまま発起人会に移行され、昭和56年1月25日に設立総会を開催すべく、現在準備中の模様である。同協会はかねて西堀栄三郎氏よりその設立が提案されていたもので、当日の出席者は下記のとおり。

宇山 厚（元駐インド大使）
 桑原武夫（京都大学名誉教授・芸術院会員）
 西堀栄三郎（日本山岳会々長）
 原 寛（東京大学名誉教授）
 中尾佐助（鹿児島大学教授）
 津村重金（津村順天堂会長）
 東郷文彦（前駐米大使）
 八坂伝郎（築波インターナショナルセンター所長）
 川喜田二郎（築波大学教授）
 大槻 廣（高砂香料総合研究所）
 栗田靖之（民族学博物館助教授）
 高田仁覚（高野山大学教授）
 西岡里子（西岡京治夫人・コロポ専門家）
 小方全弘（富士印刷社長）
 中坪 皓（東京理科大学山岳部OB）
 同協会についての問い合わせは下記で受付けている。誰でも入会できるとのことである。

第1回日本ヒンズークシュ・カラコルム研究会開催さる

第一回の日本ヒンズークシュ・カラコルム研究会が11月29日～30日の2日間に亘って蒲郡市で開催された。1978年までは「会議」と称していたが、10回目をもって終了した。今回は1年の休息期間をとり装いを新たにしての再開であった。

当日は約60名のカラコルムニストが参集した。

吉沢一郎会長の元気な挨拶の後6名の講演・研究発表があった。

(1) 湯浅道夫氏「イスラーム」について

特にパキスタンにおけるイスラーム法の近代化にスポットを当て、共同体建設のための執行機関としての政治や法改革について話された。

(2) 塚本珪一氏「コングール山群の自然」

本来の登山に先立って本年先遣隊としてこの地域に入った報告がスライドを使用して報告された。この地域の自然がネパールやカラコルムと一味違うような印象を受けた。

(3) 雁部貞夫氏「カフィールの神々」

何度も足を運ばれた成果であるスライドを交えての楽しい話であった。

(4) 高橋正治氏「バルティの言語について」

バルティ語が生き続けている地域についてその定着するまでの経緯や分布の状況等について発表された。

(5) 松本徳夫氏「ヒンズークシュ・カラコルム山脈の上昇問題」

山脈の高度が上昇する原因について、侵蝕や大陸移動・プレートテクトニクス等について発表したが大変興味深かった。

(6) 落合守和氏「タシュクルガンのタジク語」

ワハーン回廊の東にあるタシュクルガンで話されているタジク語について、文献を引用して発表された。

東京ヒマラヤ集会報告

◎9月定例会集：9月26日PM7:00～ 於HAJルーム

1978年の遭難をのり越えて本年見事カラコルムのジュトマル・サール(7,330m)の初登頂を成しとげた本会々員の杉本忠男氏を迎えてスライドを見ながら行なわれた。夜遅くまでカラコルム談議に花が咲いていた。(参加者9名)

◎10月定例会集：10月27日PM7:00～ 於HAJルーム

ネパールから帰国したばかりの高橋照氏をむかえ、一杯飲みながらのネパール談議となった。ま

た登山学校の尾形好雄隊長からはスライドを交えたガンゴトりの報告があった。

《参加者》高橋照、佐々木一夫、黒沢文代、大澤清美、尾形好雄、菊地薫、飛田和夫、山田昇、谷岡俊匡、藤倉和美、山森美智子、山森直樹、山森欣一、角田不二

インフォメーション

SECRETARY OF MANASUL

1975年プレモンスーン期にP29(7,835m)の東面に挑んだ兵庫岳連隊の記録。写真、スライド、図版が多く、レイアウトも洗練されていて読み易い。第I部交信録、第II部行動録、第III部資料編で構成されている。B5版、115ページ、頒価2,000円、送料250円。

《申込先》〒663 西宮市上田中町12-22

岡田和泰 Tel 0798-47-4191

未知なる頂へ

1979年夏、東部ヒンドゥークシュのヒンドゥーゴルゾム(6,216m)に遠征したズビダーニエ同人隊の記録。「未知なる頂へ」「初登頂への道程」「記録」「資料」の4章からなる。B5版、215ページ、上製本

《申込先》〒214 川崎市多摩区三田2-542-2

生田中学校内 坂原忠清

新刊図書一覧

- ①木村駿・木村治美／著、「曙のイスラマバード」文藝春秋、1980・10、238p、1,000円。
- ②瓜生卓造、「桜の湖」、東京新聞出版局、1980・10、349p、2,800円。
- ③小槻晴明、「魅せられてインド」、潮出版社、1980・10、221p、980円。
- ④樋口隆康、「ガンダーラへの道——シルクロード調査紀行——」、サンケイ出版、1980・11、239p、1,500円。
- ⑤佐瀬稔、「狼は帰らず——アルビニスト森田勝の生と死——」、山と溪谷社、1980・12、308p、980円。
- ⑥本田靖春、「栄光の叛逆者——小西政継の軌跡——」、山と溪谷社、1980・12、263p、980円。
- ⑦王治来、「中亜史・第一巻」、北京(中国)、中国社会科学出版社、1980・4、287p、1元=600円、(中国語版。中央アジア史概談。初版10,000部)。
- ⑧常任俠・編著、「印度与東南亜美術発展史」、上海(中国)、人民美術出版社、1980・1、202p、1.40元=840円、(中国語版)。

ヒマラヤの情報が満載——「ヒマラヤ」合本

このほど「ヒマラヤ」の合本を製作致しました。今回は61～80号、81～100号の2分冊です。既刊の20～50号、41～60号も若干在庫があります。各冊ともその時代のヒマラヤの様々な話題や情報、またじっくり読める記事などが豊富に掲載され、永久保存版として最適です。

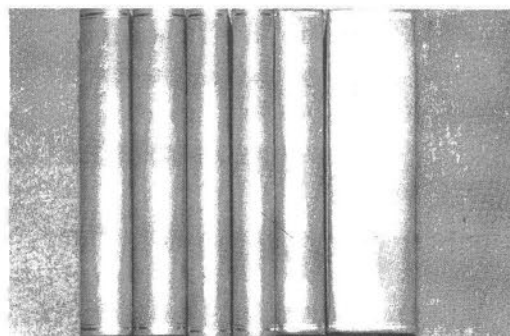
①20～50号 1971年8月～1976年1月

②41～60号 1975年3月～1976年11月

③61～80号 1976年12月～1978年7月

④81～100号 1978年8月～1981年2月

※①、②は各3部しか在庫がありません。申し込み順にメ切りしますので、HAJ事務局までお早め



に./!

※定価格8,000円。送料実費(まとめて請求書と同封しますので、到着後に振込んで下さい)

- ⑨中央民族学院少数民族語言文学系・藏語文教研究藏文学小組・編、「藏族民間故事選」、上海・中国、上海文艺出版社、1980・5、404p、1.25元 = 750円、(中国語版。「少数民族民間文学叢書」)。
- ⑩川崎精雄・望月達夫他著、「続・静かなる山」、茗溪堂、1980・11、205p、1,800円。
- ⑪土屋守・編、「ラダック関係文献目録」、東京、ラダック研究会、非売品。
(ラダック研究会 = 東京都板橋区若木町1-7-3、吉浅荘2号室、土屋守方)。
- ⑫広西壮族自治区民族事務委員会・編、「今日の広西少数民族 — 1958~1978 —」、南宁(広西省)・中国、広西人民出版社、1978・9、172p + 写真、0.71元(精装版) = 430円、(中国語版)
- ⑬族簡史・編写組、「畚族簡史」、福州(福建省)・中国、福建人民出版社、1980・6、110p、0.50元(平装版) = 300円、(中国語版、初版7,700部)。
- ⑭金倉圓照、「ジャンカラの哲学(上) — プラフマーストラ積論の全訳 —」、春秋社、1980・10、XVI + 542p、8,000円。
- ⑮福田徳郎、「遺跡にみる仏陀の生涯 — INDIA — 写真とガイド」、三学出版、1980・11、438p + 9p、3,300円。
- ⑯杉村棟/解説、並河萬里/写真、「ペルシャの名陶」、平凡社、1980・10、174p、18,000円。
- ⑰鳥羽季義/編、「ネパール語基礎千五〇〇語」、大学書林、1980・10、IV + 129p、2,000円。
- ⑱日比野丈夫/解説、築島裕/訓点解説、「西域求法高僧伝集」、八木書店、1980・11、480p、14,000円、(天理図書館善本叢書漢籍之部・第五卷)。
- ⑲大野徹/編、「ビルマ語基礎千五〇〇語」、大学書林、1980・1、130p、1,600円。
- ⑳サイレーシュ・サンカーラ著/戸川幸夫・樺部ふじ・訳、「タイガー」、講談社、1980・10、263p、2,500円、(インド虎について)。
- ㉑森田勇造、「日本人の源流 — ヒマラヤ南麓の人々 —」、冬樹社、1980・11、247p、1,500円。
- ㉒野添憲治、「ネパール紀行」、無明舎出版、1,400円、(地方小出版流通センター扱い)。
- ㉓石川忠良、「新しき国生み ≪ビルマ戦線従軍記≫」、あさを社、1,500円、(地方小出版流通センター扱い)。
- ㉔P・クトムピア/著、幡井勉・坂本守正/共訳、「古代インド医学」、出版科学総合研究所・発行、研数広文館・発売、1980・7、322p、6,500円。
- ㉕喻翠容・羅美珍/編著、「泰語簡志」、北京、民族出版社、1980・8、136p、0.46元 = 280円、(中国語版。初版3,500部。≪国家委移民族問題五稈叢書≫之一、「中国少数民族語言簡志叢書」)。
- ㉖梁敏・編著、「伺語簡志」、北京、民族出版社、1980・8、115p、0.39元 = 240円、(中国語版。初版3,500部。≪国語民委民族問題五稈叢書≫之一、「中国少数民族語言簡志叢書」)。
- ㉗刘允漢、「イ族社会歴史調査研究文集」、北京、民族出版社、1980・8、237p、0.55元 = 330円、(中国語版。初版5,800部)。
- ㉘≪回旋簡史≫編集組、「回旋簡史」、銀川(寧夏回族自治区)・中国、寧夏人民出版社、1978・10、116P、0.27元 = 170円、1980・6(第二刷)、(中国語版。第二刷まで41700部発行)。
- ㉙季星/編著、君島久子/訳、「白族民間故事伝説集」、三弥井書店、1980・1600円
(世界民間文芸叢書第11巻)。

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)各地の社会情勢、現地事情(入山事情)、登山隊の動勢など。

紀行 遠征、旅、トレッキング……ヒマラヤとそれをとり囲む地域のものであれば、何でも結構です。採用分には粗品を進呈致します。

日本からヒマラヤから ヒマラヤからの便り、ヒマラヤについて日頃思っていること、HAJや編集部に対する提言などもお寄せ下さい。

●送り先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1-506 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

(ジープ2台)

1.76元×350km×2=2,464元

回送車 50%=4,200元

輸送費③ 22,080元÷3,356,160円

キャラバン馬(往45、復24、計69頭)

32元×4日×69頭=8,832元

回送馬 16元×8日×69頭=8,832元

馬夫(3頭に付1人)

16元×12日×23名=4,416元

協力員給料・食費 14,068元÷2,138,336円

給料(リエゾン・通訳)

32元×2名×75日=4,800元

(管理員・コック)

26元×2名×75日=3,900元

食費 22元×4名×61日=5,368元

保険料 3,960元÷601,920円

リエゾン・通訳

1,060元×2名=2,120元

管理員・コック

740元×2名=1,480元

手数料 10%=360元

合計 104,198元÷16,314,160円

総計 45,000,000円

(2) ネパールの場合

隊名	法政大学ラムジュンヒマール登山隊
主催	法政大学体育会山岳部
実施時期	1980年プレモンスーン
隊の規模	隊長1名、隊員8名、医師1名 L.O. 1名、サードー1名、ハイポーター2名、コック1名、キッチンボーイ1名、メールランナー2名、ウッドカッター2名
山の標高	6,983m

〈国内費〉

準備費 464,795 (計画書、庶務他)

装備費 804,052

食料費 214,292 (高所食、調味料他)

輸送費 1,045,251 (隊荷1,370kg)

渡航費 1,702,200 (隊員10名)

医療費 202,550

登山料 100,084 (1/2)

保険料 449,200 (隊員10名)

記録費 72,940

合計 5,055,364円

〈国外費〉

装備費① 640,500 (支給品)

” ② 686,666 (プロパンガス、他)

食料費 286,440 (米、小麦粉、野菜、他)

滞在費 499,804 (カトマンズ、バンコク)

輸送費 729,906 (通関費用、トラック、バス、カトマンズ→東京等)

雇用費 1,134,743 (L.O、シェルパ、BC要員、ローカルポーター等)

通信費 38,531

エージェント手数料 100,000

(エクスプレス・トレッキング社)

登山料 105,210 (1/2)

交通費 196,667

保険料 80,850 (L.O、シェルパ、BC要員等)

合計 4,499,317円

総計 9,554,681円

※1Rs = 21円として計算

〈備考……輸送費内訳〉

◎空輸荷物料金 756円/kg

◎航空運賃 158,000円/人当

◎航空会社 隊員 エアインディア(～BKK)

ロイヤルネパール(～KTM)

隊荷 タイ航空

◎通関料金(輸送費+装備費×23.76%)

装備価格(消費品) 6,117Rs

(再輸出品) 3,512Rs

輸送料 45,850Rs

総額 55,479Rs

関税 ×23.76%=13,182Rs

÷276,822円

◎輸送経費

法政大学～空港倉庫(トラック) なし

空港倉庫～成田(業者の手配) 25,000円

成田～バンコク 614,603円

バンコク～カトマンズ 248,235円

カトマンズ～ホテル(トラック) 220Rs

ホテル～ドゥムレ(トラック、4t車) 4,800Rs

ボカラ～カトマンズ(ミニバス)	1,200 Rs
ホテル～空港(トラック)	170 Rs
カトマンズ～成田(70kg)	86,625 円
成田～法政大学	3,600 円
◎カトマンズ通関までの諸雑費	
書類作成料(三井空港)	2,000 円
ターミナルチャージ(成田空港)	45,000 円
取扱手数料(成田空港)	2,000 円
通関手数料(成田空港)	4,200 円
インポートライセンス(エクスプレストレッキング社)	610Rs ÷ 12,810 円
通関費	13,182Rs ÷ 276,822 円

(3) インドの場合

隊名	飛弾山岳会インド・ガンゴトリ登山隊
主催	飛弾山岳会
実施期日	1980年ポストモンスーン
隊の規模	隊長1名、隊員6名
山の標高	6,672m

◀国内費用▶

渡航費	1,512,000 円(成田～デリー エア・インディア 216,000 円×7人)
輸送費	252,000 円
装備費	632,000 円
食料費	159,000 円
国内交通費	121,000 円
事務手続費	107,000 円
雑費	121,000 円
合計	2,904,000 円

◀国外費用▶

登山料	130,000 円
滞在費	154,000 円
エージェンツ料	1,215,000 円
(現地調達装備、食料費、交通費、ポーター賃、その他キャラバン中の諸経費一切を含む)	
雑費	225,000 円
合計	1,724,000 円
総計	4,628,000 円

(4) パキスタンの場合

隊名	法政大学2部体育会山岳部OB会カラム登山隊
主催	法政大学2部体育会山岳部
実施時期	1979年夏
隊の規模	隊長1名、隊員6名、医師1名 L.O.1名
山の標高	7,200m

◀国内費▶

装備費	367,348 円
食料費	137,736 円
記録費	187,535 円
輸送費	924,028 円
総務費	397,000 円
渡航費	1,816,000 円
医療費	52,010 円
保険料	298,078 円
通信費	33,834 円
旅費	5,600 円
交際費	45,125 円
借家料	285,000 円
事務用品費	29,635 円
会議費	80,220 円
福利費	11,935 円
光熱費	18,000 円
支払手数料	38,672 円
雑費	16,820 円
予備費外	161,450 円
合計	4,906,026 円

◀国外費▶

装備費	45,277 円
食糧費	89,565 円
輸送費	373,347 円
人件費	1,533,580 円
宿泊費	382,070 円
滞在食費	38,452 円
市内交通費	16,642 円
通信費	22,962 円
保険総務	182,891 円
合計	2,684,786 円
総計	7,590,812 円

登山隊関係経費比較表

※物価は80年春のものです。

	中 国	ネ パ ー ル	イ ン ド	パ キ ス タ ン
	1 元 ≒ 155 円	1Rs ≒ 20 円	1Rs ≒ 30 円	1Rs ≒ 25 円
登 山 料	エヴェレスト 4,000 元 ≒ 62 万円 8,000m 以上 3,200 元 ≒ 50 万円 7,000m 以上 2,400 元 ≒ 37 万円 6,500m 以上 1,600 元 ≒ 25 万円 6,500m 以下 1 人当 80 元 ≒ 1.2 万円	エヴェレスト 15,000Rs ≒ 30 万円 8,000m 以上 14,000Rs ≒ 28 万円 7,501m 以上 12,000Rs ≒ 24 万円 6,601m 以上 10,000Rs ≒ 20 万円 6,600m 以下 8,000Rs ≒ 16 万円	21,000 フォーター以上 4,000Rs ≒ 12 万円 21,000 フォーター未満 3,000Rs ≒ 9 万円	K 2 30,000Rs 8,000m 以上 20,000Rs 7,500m 以上 15,000Rs 7,000m 以上 12,000Rs 6,001m 以上未登峰 10,000Rs " 既登峰 8,000Rs 6,000m 以下 7,000Rs
都 市 滞 在 費	(北京・西都・西寧・ウルムチ) 1 泊 3 食 90 元 ≒ 14,000 円 ただし、3 人～14 人の場合は 1 人 80 元 15 人以上の場合は 1 人 70 元 (ラサ) 1 泊 3 食 250 元 ≒ 39,000 円	(カトマンズ) エクスプレスハウス(朝食付) 35Rs (2 食付) 55Rs コテージ・ホーロー(部屋のみ) 60Rs	(デリー) コンノート付近の中級ホテル 60～100Rs (税・サ別) (ジョシマート・ウツタルカシ) 10～30Rs	(ラワルピンディ) ミセスデービス 115Rs (三食付) (ギルギット) ワシユグー・ム・イン 40Rs (食事別) (スカルド) K 2 ホテル 150Rs (食事別) ※スカルド、ギルギットの食事は 1 食 10～15Rs
人 件 費	連絡官 32 元 ≒ 5,000 円 通 訳 32 元 ≒ 5,000 円 キャンプ管理人 26 元 ≒ 4,000 円 コック 26 元 ≒ 4,000 円 高所協力員 29 元 ≒ 4,500 円 低所ポーター・馬方 16 元 ≒ 2,500 円 (馬方は馬 3～4 頭に 1 人) 支給食費 連絡官・通訳 1 人 1 日 22 元 その他 17 元	連絡官 40Rs ≒ 800 円 サーター 38Rs ≒ 760 円 ハイポーター 35Rs ≒ 700 円 BC 要員(コック、キッチンポーター、 メールランナー) 25Rs ≒ 500 円 ローカルポーター 24Rs ≒ 480 円	ハイポーター (スリナガール) 35Rs (マナリ) 40～50Rs (ウツタルカシ) 25～40Rs ローカルポーター (スリナガール) 30Rs (ウツタルカシ) 21Rs	連絡官 60Rs 宿泊・交通費は隊から実費払い (スカルドサイド) ハイポーター 65Rs + 食事 クーリー(最奥の村まで) 52Rs + 食事 or 15Rs クーリー(最奥の村より上) 70Rs + 食事 or 15Rs (ギルギットサイド) ハイポーター 90Rs + 食事 クーリー 90Rs + 往復食事 or 22.5Rs

日本ヒマラヤ会議報告(前橋・大町)

前橋会場(第7回)

日時 昭和55年11月2日(日)12時~3日(月)15時

前橋会場は、地元群馬県山岳連盟との共催で、「インドヒマラヤ」を中心に行った。本年度ガンゴトリ山群で目ざましい成果をあげた日本隊であるがそれを反映して会場には総勢70名が参加するという盛況さであった。

初日は、群馬県山岳連盟海外委員長の八木原陽明氏と稲田専務理事の挨拶のあと、早速会議に入り、稲田定重講師による「インドヒマラヤのすべて」と題したインド全般についての講義があり、引き続き豊富な高所登山体験を持つ田中壮佑ドクターからエベレスト等のデータを中心とした高所医学の講義がスライドを交えて行われた。

次いで尾形好雄講師による「ヒマラヤ登山とトレーニング」と題する講演があり、トレーニングの必要性を考えるキッカケとなった高所登山での体験や今後の目標から、どの部分を鍛える必要があるか、又、そのためには、どのような方法があるか、そして、現在自分が実行している内容、方法が具体的に話され、会場の興味を誘っていた。

続いて山森事務局長から、ヒマラヤ登山の事故について紹介があり第一日目の日程を終えた。

夕食は懇親会を兼ねて行なわれ、会場の都合で二手に別れた後もあちこちの部屋でなごやかな交換風景がくり広げられていた。

二日目は、本年インドヒマラヤへ入山した登山隊の報告から始まった。各隊30分と持ち時間は短かったものの、スライドや8ミリフィルムを駆使しての報告は楽しいものであった。報告隊は予定通り、H A J・ケダルナート、立命館大・パンワリドワールとバスキバルバット、登嶺会・カルチャクンド、兵庫労山・シプリン、女子雪氷・バギラティII、群馬高体連・CB53の6隊であった。

最後に「インドヒマラヤを取りまく諸問題」と題するパネルディスカッションを行ったが、許可取得から入国、通関、エージェント等々一連の問題



について要領よく行われ、質疑も活発に行われたため時間が足りない感があった。

最後に全員で記念撮影を行って二日間に亘たる会議を終了した。

大町会場(第8回)

日時 昭和55年11月16日(日)9時30分~17時

北アルプスの山々が冬の装おいをこらす小春日和に大町市の高台にある長野県山岳総合センターに31名の参加者を得て大町会場を開催した。

定刻、今回の事務局である清水澄理事の司会で講師・参加者の自己紹介のあと、山森事務局長から会議の目的について経緯が話された。

続いて会議に入り、尾形好雄講師による「ヒマラヤ登山とトレーニング」は前橋会場と同じ。今回は参加者から具体的な内容についての質問が多く、流石に山岳先進国との印象であった。

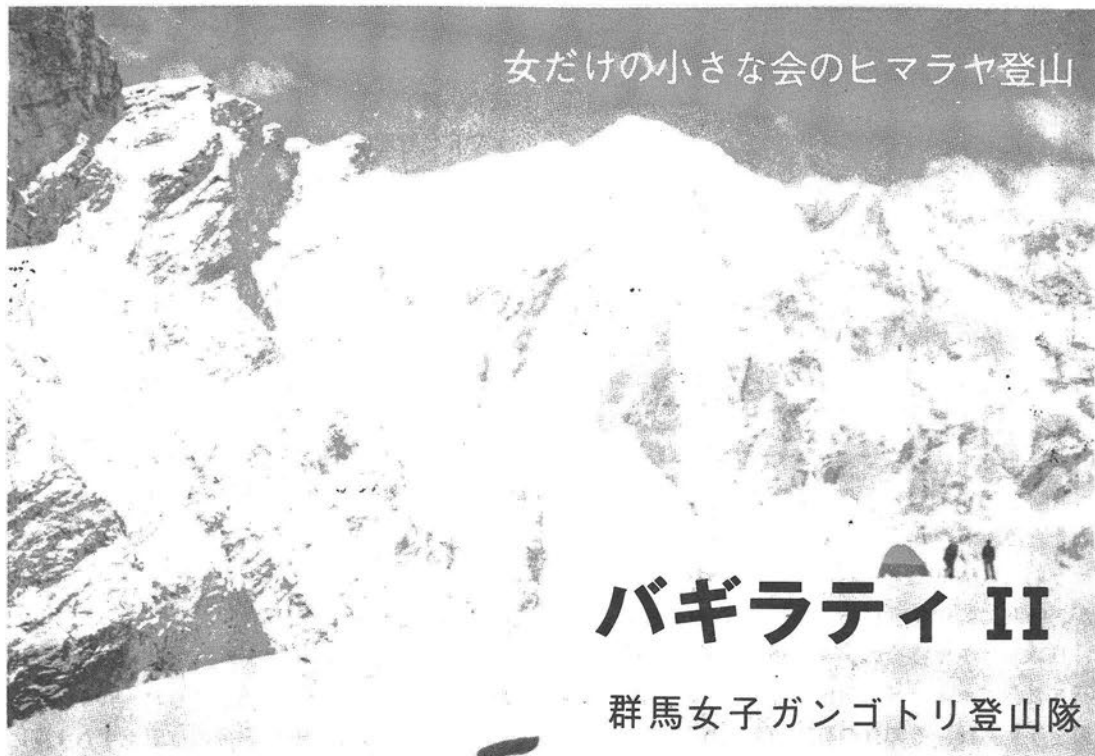
山森事務局長から「ヒマラヤ登山と事故」について特に研修は真剣でありたいこと、短期速攻は経験者向きであること等が強調された。

午後は、最近のヒマラヤ諸国の情勢について、H A J・ケダルナート隊の尾形好雄氏、法政大学・ラムジュンヒマール隊の上総紀久男氏、ベルニナ山岳会・ガッシャーブルムII隊の佐藤英雄氏より現地の情勢が詳細に話された。

場所を視聴覚教室に移し、上記のそれぞれの登山の様子がスライドを交えて詳細に報告されて、会議を終了した時は秋深い信濃路はとっぴりと日が暮れていた。

(山森・記)

女だけの小さな会のヒマラヤ登山



バギラティ II

群馬女子ガンゴトリ登山隊

発 端

多くの人にとって、いままで遠い所にあったヒマラヤが、身近になり始めた風潮の頃、安中は日本ヒマラヤ協会のトリスル登山学校参加の機会を得た。

安中はその登山に一応の満足を示した。しかし吸収した何がしかを形に表わしてみたいとも考えた。インドから仲間がたくさん手紙を書いた。“次にくる時は、ぜひ一緒に——”と。トリスルの報告書から手が離れた頃、おりにふれ浅野を誘い、何ヶ月か経った後、浅野からOKの返事が来た。

2人で山岳会内の会員に声をかけ、自分達を含めて5人は行く意志のあることを確認、これで何とかなる目鼻はついた。概要を定め、他の山岳会にも声をかけ、部外からの参加者も仰いだ。山の選択に関しては、日本ヒマラヤ協会の稲田氏に全面的な助力を受けた。

ヒマラヤへ行きたいという意志があれば、後は何とかなると言って集めたメンバーだったので、隊は右往・左往・立往生することが多かった。今思うに、基礎体力・基礎知識がもっと欲しかった。

漠然とあこがれるだけでは、何もできない。

短い準備期間であったが、メンバーの入れ替えもあった。事前準備が窮屈になって、去っていった者。職場の圧力にたえられなかった者。出発際にケガをしてしまった者。隊は7人になった。

重箱の隅をようじでつつく様な細かい事を気にしている割には、大きな穴をよくあけた。隊荷持ち込みの申請書のミスから、送り込む箱数を制限され、現地で再梱包するはめになった。但し、聞くところによると、通関の件は以前よりだいぶ楽になったとかで、新しい書類を用意すれば何とかなるらしい。

アプローチマーチ

ワイワイしながら1年が過ぎ、8月30日、先発の浅野・船水が日本をたっていった。次いで9月13日、本隊出発の日がきた。ケガをして参加できなくなり、成田から帰っていった小暮が寂しそうだった。

14日デリー空港到着。登山隊かと聞くので、そうだと答えたら、たいした荷のチェックもされず、外へ出してもらえた。外にはエージェントの



バスが待機していて、そのままホテルへ直行。仮眠をとる。BCまでは全て旅行社まかせである。そういう登山はおもしろみがないと嫌う人も多いが、時間に制約を受ける人にとっては便利である。

日本ヒマラヤ協会のケダルナート隊と我々と、バス2台でキャラバン開始。毎朝、かわいい弁当箱を与えられ、その日の目的地まで直行。中身は毎日あきもせず、りんご・ジャガイモ・パン・チーズ・あめ・卵など。

2～3日もすると、「こんなもの食えない」「汚ない」と愚痴りだす者もいる。一ヶ月も食わないでいられるわけではない。腹が減れば、どうせ理屈をつけて食い始めるだろう。風土順化する事が、自分の潔癖を損うことだと考えてるとしたら、それはまちがっている。

ゴウモクでガンゴトリ氷河の末端を目にし、楽しいキャラバンもいよいよ終りに近づく。BC(ナンダンパン4,300m)の入口で先発と会って喜んだのもつかのま、あちこちで嘔吐者続出。

登高……苦悩と焦り

9月20日、BC入りの翌日、下りたいという2隊員にハイ・ポーターをつけて下らせる。他は隊員5名とハイ・ポーター1名でC1予定地へ向けて荷上げを開始する。昨夜からの降雪でBC付近は一面の雪景色。まだよくなる気配ではないが、逸る心におされて上へ。

胃液をはきながら登る苦しそうな隊員の顔と降雪再開の為、結局その日は立命館大のバスキ・バルバット(6,792m)のBC(4,700m)でおり返しと

なった。

21日はBCで休養。テントの外では雪が降り続く。荷上げ品などを割り振っていると、リエゾンやBC管理の旅行社の社員が、何やかやとうるさい。負荷量はどれ位がいいとか、ハイポーターをもっと使えとか、ラッシュ登山のようにやれとか、彼等の登山観でもって、私達の行動に口出しをする。始めはいろいろ説明して納得してもらおうと思ったが、いくら言っても基本姿勢が違うのに融合するはずはない。面倒くさいから最後は、“This is our Expedition.”でおしきる。

22日、陽光を浴びて輝くシブリン(6,543m)を背にまた行動開始である。全員一昨日より顔の表情も明るく、歩調もいい。

BCからチャトラギ氷河に沿って、まっ白なサイド・モレーンの上を歩き、前記の立命館のBCの所で直角に折れる。バギラティII峰の裏側(東側)のごうろ状を少し登った地点にC1(4,800m)設営。

バギラティII峰——自分の位置をずらす度に形の変る山である。西側から見る限り、研ぎ澄まされた極めてシャープな山なのに、北側から東へ度を変えると鈍重そうな形へと移行していく。

当初計画していた北稜は、我々には難があるようだ。さっさとあきらめて、すっかり北稜をまき込んだ前記のごうろ状のおわるあたりにC2(5,300m)設営。24日のことだ。C2の高さまで登るとまわりの山がより威圧的に写る。背後の岩峰バスキ、バギラティI峰(6,856m)、バギラティIII峰(6,455m)も端麗である。

高度順化と偵察を兼ね、C2停泊後なるべく上部へ行ってから、C1へ戻って休養とした。今後のルートの見通しがつかないまま、毎日各パーティがC1へ戻ってきた。

西側のあの絶壁を登るなど話の外だし、北から東をまわり込んで南東まで行った。今までのところには、どこも易しいルートはなかった。という消去法で、やはり現在登っている所しかないということになった。日数が限られている。天候が変わるかも知れない。山頂へのルートも易しいのが見つからない。とあっては次第にあせりの色がでてくるのを止められない。とにかくII・III峰間のコルまで行けば、上への可能性が見つかるだろう。期待



と切実な願いをこめて、また単調な一歩を踏み出す。

C2からII峰に向けて、左上ぎみに登高をくりかえす。C3(6,000m)建設、9月29日。平な所がないので、アイスハンマーとピッケルでガレ場をけずって、テントを張る。もろい変成岩が、足元から雪面をすべっていった。

30日、II・IIIのコルまで偵察に出た結果は、極めて絶望的であった。コルから少しII峰寄りの上部まで行ったところ、稜の反対側はスッパリ切れていて、まわりこむことなどは到底できない。上部はと見やれば、もろい岩の積み重なったオーバー・ハング。ここまできるとにだってポロポロの岩に神経すり減しているのに、“Oh/easy mountain, only walking.”なんて言ったやつは誰だ/氷河を隔てた対面に、双耳峰のシブリンがあった。ケダルナートののびやかな雪面、めまいのしそうなバギラティIII峰西壁。もう2度と来ることのないこの地点、ひどくみじめな気持で、それでもシャッターだけは切ってC3へ戻る。

明日は上部の岩峰を右からまき込んで行ってみよう。もう他には考えられない。浅野・久保塚はドイツの登ったルートの方から偵察にでる為にC2に下りた。

翌日、不調の古島をC3に残し、隊員4名とナラヤンというハイ・ポーターで、上部へのルートを探しに出発。雪とガレ場のミックスした所を、岩峰のつけね目ざして、まっすぐ右上していく。“もっと雪が付着していれば、C2から直上できるであろう。そして、もっと楽かも知れない”などと心の中で、そっとないものねだりをする。

岩峰の右端の下部へきた。ここから上も相変らずのガレ場ミックス地帯。前より傾斜の増した斜面を直上していく。安全の為、ザイルを固定する。下からベタ張りにする程運んだザイルだもの、ふんだんに使おう。

登 頂

どうやら上部への見通しもついてきた。浅野パーティと交信、事情を説明し、C3へ戻るよう伝える。その日150m程固定し、残りの荷は最上部ヘデポして、C3に下る。

2日、今日は山頂を踏めることだろう。天候を

憂慮して出発は遅れたが、隊員7名とナラヤンの計8名で出陣。歩行速度にバラツキがあり、先頭と最後尾でかなり差がつく。さらに傾斜を増した昨日のルートの上部に、続けてザイルをセットしていく。下から計300m位張って、稜線へ出た。

双耳峰低峰で15:00。今日はもう前へは進めない。いつもの事だが歩みが鈍すぎる。日を改めたら、たぶん全員ではこられないだろう。でも今日はもう帰るんだ。下る前に一応旗を掲げて記念写真をとる。心から喜んでいない顔は複雑な表情だ。

ここから先本峰へは、2日あけた10月5日、安中・浅野2名が登った。低峰から隔時登はんをとり、最初40mいっばいの雪稜を下る。岩稜で始まる登りは、途中7m位の残置ロープがあった。3ピッチ目は右に下降気味に35m位、上の岩場をまいた。次は5~6m直上、そして、そこから右上して、あの美しいスカイラインの北稜へ。深く雪面にうちこんだピッケルに守られて、やがて山頂へ。

狭い山頂だ。雪もあるが、岩もゴツゴツ顔を出している。金属ポールにつけられ、旗めいているグリーン三角旗は、たぶんドイツ隊の残っていたものであろう。涙はでてこなかった。歓声もあがらなかった。でも登れてとてもうれしかった。

今回、私達の果たした役割があるとすれば、それは“やれば誰にでもできる”という、ヒマラヤ大衆化の一端だと考える。日常生活からの遊離を極力おさえ、またヒマラヤへ行けたらと考えている昨今である。 (安中・記)

◀ 隊構成 ▶ 隊長 安中秀子 副隊長 浅野さつき
隊員 久保塚隆子、古島君子、増田伊世子、松本実千代、船水久美子

遠征学入門

XX

実践篇

タクティクスについて(3)

清水 澄

登山方法の考え方について

スケールの大きなヒマラヤ等での登山では、麓から一気に頂上をおとし入れることは出来ない。そこで、速い、遅いの別はあっても、徐々に高度を上げて頂上にせまることになる。そのせまり方の速度の速いのは短期速攻型と云われて、今現在脚光を浴びている。遅いのはオーソドックスな極地法であり、最も一般的な攻略法となっている。また、アルパイン・スタイルと云われる方法も近年盛んになりつつある。

まず基本となるオーソドックス型をみてみよう。ヒマラヤの高所に順応しながら、ベース・キャンプとの交通連絡を保ち、頂上へ向って行くのに最も適した方法として、ヒマラヤ登山の初期からとられている。極地探検と同じ様に、キャンプを段階に前進させて行くので極地法と呼ばれるやり方である。ただ厳密に云うと、極地探検では次々とキャンプを移動して前進させて行くのに対し、ヒマラヤ登山では、一度設置したキャンプはそのま

ま登山が終了するまで残しながら幾つかのキャンプを進め、それぞれのキャンプには隊員が常駐して前後の連絡を保つのである。もっともこれは両者とも原則論であって、変型もあるのだが。

さてそこで前進させて行くキャンプの間隔であるが、どれぐらいが良いのであろうか。間隔が遠ければ総体としてキャンプの数が少なくて済み、それだけ資材も少なくて良い。また1日当りの行動量も増すことになるので、登はんスピードも能率的で、全体としての期間も短かくて良いことになる。けれども行動量の増すことによる疲労や高度差の多くなることによる高所順応の失敗もまた多くなると考えなくてはならない。さらに荒天時などには連絡交通が途絶えやすく、避難も困難性を増すであろう。一方逆にキャンプ間の間隔が近ければ、そっくりこのままの逆のことが云えることになる。

数々の遠征の経験から最も良さそうな間隔が学び出されて来たところによると、それは高度差で500mから700mと言われる。平坦路や緩傾斜では勿論この数字は小さくなるが、一般に距離はあまり問題とはならない。最近では登山用具や通信手段の進歩、また登山隊の増加によるより多彩な試み等により、時に1,000m、或いはそれ以上の高度差も採られることもあるが、やはり一般的とは言えない。一日当りの行動量と疲労は順応にも大きく関係して来るので、基本的にはこの数字は尊重されるべきものであろう。

オーソドックス型は、この様な間隔で設置したキャンプ間を荷上げやルート工作で上下しながら充分に時間をかけて順応をして前進して行く。大遠征隊や初経験者向きの方法であり、堅実と云える。

では次に短期速攻型をみてみよう。キャンプの設置に関しては、これも一応極地法である。ただ短期速攻と言う字が示すように時間をかける訳ではないので、キャンプ間隔を遠くし、キャンプ間の往復による上下も少なくし、一気に頂上にせまる方法である。従って物資も少なくなるとはならず、ルートも困難な山では適さない。高所順応についても下のキャンプでは一応いねいに行うが、中高度より上では一気に行動し、高所障害の現れ

る頃には下山してしまうのである。短期速攻型に適する条件としては以下が考えられる。

1. 中高度以下の山岳であること。
2. 前進キャンプは2～3。
3. 天候の安定している時期と地域。
4. ルートが解っており困難でないこと。
5. 高所に強い隊員（経験者等）がいること。

どれ程の高さの山に対しどの程度の期間で登れば短期速攻かと言うことに関しては、厳密には解釈されていない。期間、物資をかけずに相当の山を登るのであるが、高度と期間の対照表を作れる訳でもない。考え方の基本で別かれると思った方が良いでしょう。

アルパイン・スタイルとは文字どおり、アルプス式の登り方をヒマラヤへもって来たものである。つまり、壁のようなバリエーション・ルートを2～3人の隊員で、シェルパ等の助けも大して借りずに、そして短期間で登るのである。ルートの特性上、あまりキャンプ間を上下することも出来ないの、順次上へ上へとキャンプを上げ、荷上げ往復は最少限に止められる。従って順応をはかりながら登ることは不可能と云ってよく、他のシーズンで順応を完成させた者とか、常習的に高所登山を続けている者という、いわばスペシャリストのみに許される方法である。アルパイン・スタイルでも、キャンプの進め方は極地法の範疇であるが、設置数や間隔などは短期速攻型よりも更に型破りとなる。

高々度、大スケールの山岳への登山は、安全の確保、物資の補給等の必要から、いずれの方法にしても極地法の応用である。

キャンプ間の通信連絡

キャンプ間の通信連絡は非常に大切である。最前線の高所で安心して活動出来るのは、極地法によって常に下のキャンプ、ひいては基地であるベース・キャンプと結ばれているからである。結ばれ方には二つある。一つは交通であり、他は通信である。交通については既に述べているのであるが、もう一つの手段である通信についても気のつく事を書いてみたい。

現在のヒマラヤ登山隊での通信手段は、総て無

線電話機（トランシーバー等）によっている。われわれの日常の登山やその他の機会にも、これは使われているので取扱い等は誰でも習熟していると思うので、それ自体については云うことはない。寒冷地での電池の消耗、無線機的能力低下とヒマラヤに多い落雷による故障について、充分な注意をしていれば、通常は殆ど通信は確保出来る。勿論、細かな点で云えば、波長による特性、機材、部品による性能、遠距離通信目的（ベースと街、又は日本）で種々の違いがある。その点は必要に応じ研究しなくてはならない。

通信方法であるが、同時通話ではないので伝えることを要領よくまとめ、簡潔に相手に理解してもらえることを心掛けたい。同音異意に注意すること。行動中の相手には特に通話を短かくしたい。酷寒強風の中での無線機作業は辛いものである。打合せの開局時間に間に合わないこともしばしばである。

キャンプ間では一日の行動の概要、翌日の予定、要請すべき必要物資、隊員の健康状態など、通話すべきことは山とある。また隊長からの指令指示と報告、緊急通信等々、改めてここに記すまでもないと思うことばかりである。

総て通信は長くなり過ぎないように心がけたい。通信がわずらわしくなるようでは、本来の目的にもとるといふものである。

さて、無線機も機械であるからにはトラブルも起り得る。国内登山からして無線機に慣れ切って、頼りっぱなしの山行をしている我々にとって、これが使えぬとなると手痛い打撃である。そこで、この様な事態に対する対策は考えていなくてはならない。隊長の判断がなくても正しく判断し行動出来る力と自主性も、この様な際には必要となる。また、荷上げに関しては上のキャンプの要請に頼らずに上げて行ける運行計画もなくてはならない。更に通信を早期に回復する事も重要である。代替の機器とか、文章による方法など……。

筆者の経験から云うと、通信の途絶えた時こそ、隊の結束と力量がはっきりと表れてくる。相手の声を聞かなくても考えていることが解る様になってこそ、真のチーム・ワークが保てるというものである。



花を求めて(5)

水野 勉

この「花を求めて」もじつのところ最初は6回ぐらいで終る予定であった。それで(1)のときに、山登りに夢中になっている方はこの項が終るまで「閑話」ととばして「ヒマラヤ」を読んでいたきたいと書いてしまった。しかし、今になってみると、とても6回ぐらいでは終りそうもないことがわかった。もっとあっさりとして書くつもりが、やや詳しくなってしまった結果である。プロならば、その辺のところがうまく調整できるのであろうが、悲しいかな、非才であるため、どうしても収拾がつかない。自分の筆のゆくままにただようしかないようだ。読者こそ迷惑であろうが、物事にはつき合いということがあがる。少しの間、がまんをしていただきたい。

一方、ここで扱っている中国の辺境地域はようやく脚光を浴びるようになり、多くの人々が遠征の対象として目を向け出した。アムネマチンおよびミニヤ・ゴンカはすでに開放されたし、ギャラ・ペリやナムチャ・バルワも狙われていて、申請が世界各国のパーティから提出されている。いつ急に許可が下りるかわかったものではない。そのほか、雲南から揚子江、メコン、サルウィン、イラワジの各河川流域の山々が、あるいはガントウ、クーラ・カンリなどの山々が開放される日が来ないとは言えない。

そうした背景を考えれば、「閑話」でこの地球へ花を求めて入っていった探検家たちの話を扱っても、けっして無駄ではないであろう。読者に対してもそれほど失礼にはならないであろう。それでぼくも心安らかに「閑話」をつづけることができる。

前前月号の最後の方で、サクラソウの一種がチャールズ・マリーズによってヨーロッパに紹介されたことを述べたが、このマリーズは有名な養樹園ジェームズ・ヴァイチ・アンド・サンズから派遣されたもので、かれは日本と揚子江流域とに主力を注ぐことを命じられていた。日本では主として針葉樹の種子を集める計画であった。マリーズは1877年から1879年まで極東にいたが、この計画の正しさは後になって、1899年から1905年にかけてE・H・ウィルソンの旅行によってりっぱに証明された。

マリーズは中国ではまあまあだったが、日本では成功した。かれは横浜に着くと日光へ行き、それからすぐに北海道の函館と札幌へ北上した。そして、いくつかの花々を紹介したが、ここでラテン語名を書きつらねることはやめよう。

日本に一年あまり滞在してから台湾へ渡って数週間をすごし、それから揚子江流域へと入った。九江付近で採集したが、そこではユリ科の花を採集して、ヨーロッパでポピュラーなものにした。

日本には1878年の夏と秋をすごし、ふたたび、1879年の春に揚子江へ向い、宜昌の峡谷まで入ったが、現地人とトラブルを起し、荷物を奪われ、早々に日本に戻った。しかし、サクラソウの種子をたくさん採集することができた。

マリーズは美しい植物をたくさん紹介したが、唯一の逸したものがあつた。それはケンの花であつた。3年間も極東に滞在していたのだから、ケンを採集するチャンスもあつただろうに、マリーズにとっては残念なことだつた。

さて、19世紀の末頃には、中国西部はいつも揚子江を利用して交通がなされていて、重慶は自

然的にその終点になっていた。幸運なことに代々の英国領事は自分自身が植物の採集にたずさわったし、植物学的探検には関心が深かった。

ベイバーの後には、E・H・パーカーが領事となって1880年4月から1881年12月まで重慶に駐在した。かれは時間をみつけては数多くの小遠征をして、多くの植物を採集した。1892年には安南へ長い旅行をし、同年、ビルマ政府に中国関係のアドバイザーとして任用された。

次にはサー・アレキサンダー・ボジーが後任として駐在し、中国の植物に関するヨーロッパの知識に大きく貢献した。かれは貴州、四川、雲南と広く旅行し、つねに有用なものを求めて歩き廻った。かれは非常にすぐれた観察者であった。

ボジーの次にはF・S・A・ブルネが後任となり、1884年から1887年まで重慶に駐在したが、かれもまた有用植物の熱心な採集者であった。かれは雲南府への公道で旅行をしたし、南へ向って、ツェマオ、メンツェという雲南の南国境まで足をのばした。かれの専門は中国野菜であった。

1860年からE・H・ウィルソンが出現するまでの間における最後の、しかも最大の英国人採集家はオーガスチン・ヘンリー博士である。

ヘンリーは1856年アイルランドに生れた。クイーン大学を卒業した後、エディンバラへ行って医学を修めた。1881年には中国税関に入り、1年間上海に勤務した。そこから宜昌に医務官のアシスタントとして派遣され、1882年から1889年まで滞在した。

はじめのうちは、ヘンリーは植物には興味がなく、宜昌に着任してから3年後にやっと植物採集にのり出したくらいだった。それも辺境に在る無聊を慰めるためであった。業務に追われて、ヘンリーは長い休暇を除けば遠くへは足をのばせなかった。しかし、近くの峡谷や低い山々でもかなりの収穫があった。6カ月の休暇のときには、かれは四川の揚子江まで出かけ、3,000メートル以上の石灰岩のごつごつした山の間を歩き廻り、四川の辺境にある深い谷の中まで分け入った。14年後には、ウィルソンがヘンリーの足跡をたどり、ヘンリーによって発見された樹木の種子を採集したのだった。

1889年にはヘンリーは海南島へ行ったが、わずか3カ月で、休暇をとって英国へ帰った。1891年に中国に戻ると、医務を止め、税関局の職員となり、台湾へ派遣された。ここでふたたび多くの植物採集を行った。

1896年には、また転任し、今度は南部雲南のメンツェ蒙自に派遣された。そこにはフランス領インドシナからの入口に当り、植物採集にとって全くの処女地であった。だいたい南に位置するので、植物も亜熱帯に属していたが、豊富であった。蒙自は約1,500メートルの高地にあり、山に囲まれ、紅河と黒河との分水界をなすトンキン国境近くの大山脈にもそれほど遠くはなかった。

ここで幸にも植物採集の好きな少年を見つけ、自分が行けないときには、少年が出かけていった。この頃ヘンリーの関心は、ずっと以前に雲南の南や南西部に追いやられた非中国少数民族の問題に強く向けられた。特にロロ族に興味を持ち、その民族の字を中国語に訳すことのできるロロ族の男を見出そうと苦心した。

1898年には、ふたたびメコン川の西50マイルほどのところにある、非常に未開の地、ツェマオまで出かけた。1900年にかれは無事に中国を去った。

オーガスチン・ヘンリーはこの時期には植物標本の採集にたいへん関心を持ち、中国を去るまでに5,000程の標本を収集したと自分で述べている。この地域にいかほど豊富な植物が存在するかがわかるであろう。

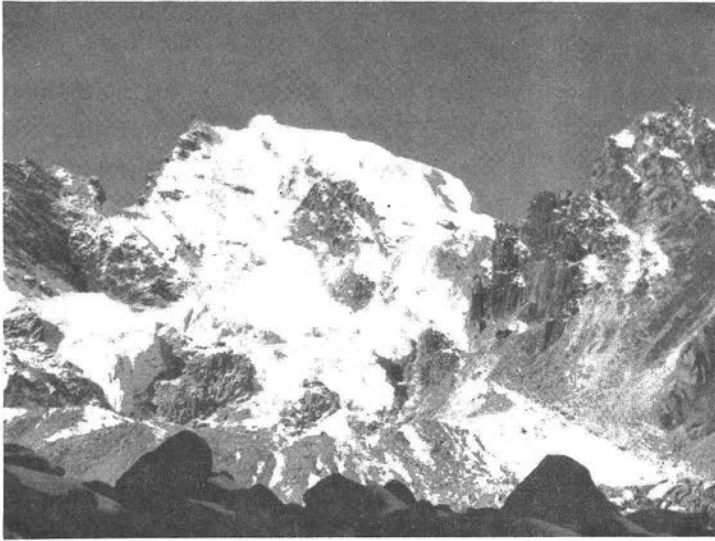
かれが発見した植物にはヘンリーの名が付いたものが多く見られる。多くのユリ科の植物をはじめ、ジャクナゲやカエデの類がある。かれの発見したすばらしい花の多くは後にウィルソンによって紹介されたのである。

かれの書いたThe Trees of Great Britain and Irelandによると、すぐれた著作者で、生き生きとした描に秀でていることがわかる。かれがメンツェおよびツェマオに滞在中に書いた書簡はHaw Bulletinに掲載されている。

かれは中国から引退してからは農業の研究に従事し、1913年から1926年までダブリンで林学の教授をつとめた。死んだのは1930年であった。

トレッキング許可で登れる

山



ガンジャラ・チュリ(ナヤ・カンガ)北面

ガンジャラ・チュリ

NWAFネパール・ヒマラヤ登山隊

はじめに

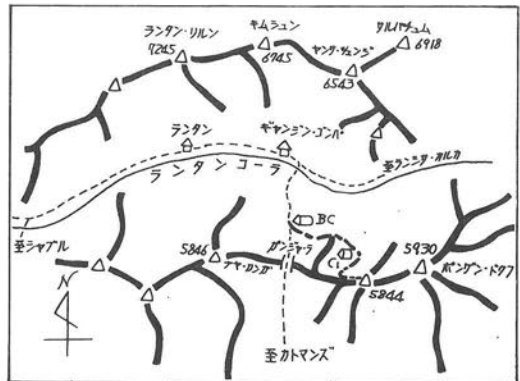
ヒマラヤの大自然は、私達登山者にとっては、大きな憧憬の対象です。自然のすばらしさを知る私達としては、誰れでもが一度は行ってみたいと思うのが、ヒマラヤの山々です。このヒマラヤの頂への夢が、ネパール政府の発表した、トレッキング許可で登山可能な18座の解禁という朗報により、大きく広がりました。

最近、社会情勢の変化と社会生活の向上とともに、ヒマラヤに行くことが容易になったとはいえ、長期の休暇の取得や、資金の調達は容易とはいえません。そういうことからしても、私達としては絶好の機会であったわけです。

登山計画

すでに私達長野県栗山内では、インドヒマラヤのビハリジョット北峰、ナンダ・デヴィ、そしてパンワリ・ドワールへ、又、アラスカのマッキン

レー等々に登山隊を送り出し、いくつかの経験を積んできた。しかし、ネパールヒマラヤへはまだ一度も登山隊は出してなく、数名のトレッキング経験者だけであった。このような中で私達は、ネパールヒマラヤへ標準を合わせ、目標の山を検討中であった折のこともあり、参加希望者を中心に実行委員会を構成し、調査検討に入りました。全員登頂や、期間、標高等いくつかの条件をあげる中で、ロールワリン山群のバルチャモ(6,282m)



に最終的に決定し、本格的に準備活動にはいりました。そして登山期間は、天候の安定していることや休暇を取り易い時期ということでポストに、又、隊員も、金井光正、小林利一(中野勤労者山の会)川口令子、小野美里(伊那山仲間)飯田平と私(佐久山の会)の6名が決定した。地域が異なる3つの山岳会、女性2名を含む構成となったが、何回かのトレーニング山行やミーティングの中で、お互の気心も知れ、チームワークも万全のものとなった。バルチャモ登頂の為の準備も整い、あと2日で出発という矢先に悪いニュースがはいる。ルクラの飛行場が、少し前にあった洪水の為、使用出来る見通しがまだついていないというのである。

出発を前に、ガネッシュヒマールのパルドール(5,894m)やランタンヒマールのガンジャラ・チュリ(5,846m)等の名前をあげるにとどまり、十分な調査検討も出来ないまま、正に期待と不安の出発となった。

私達がネパールに着いた日、モンスーンは明けルクラへのテストフライトも行なわれたと聞かされ、バルチャモへの登山に望みがもたれたが、飛行機のトラブルや飛行場の天候等により、6日間

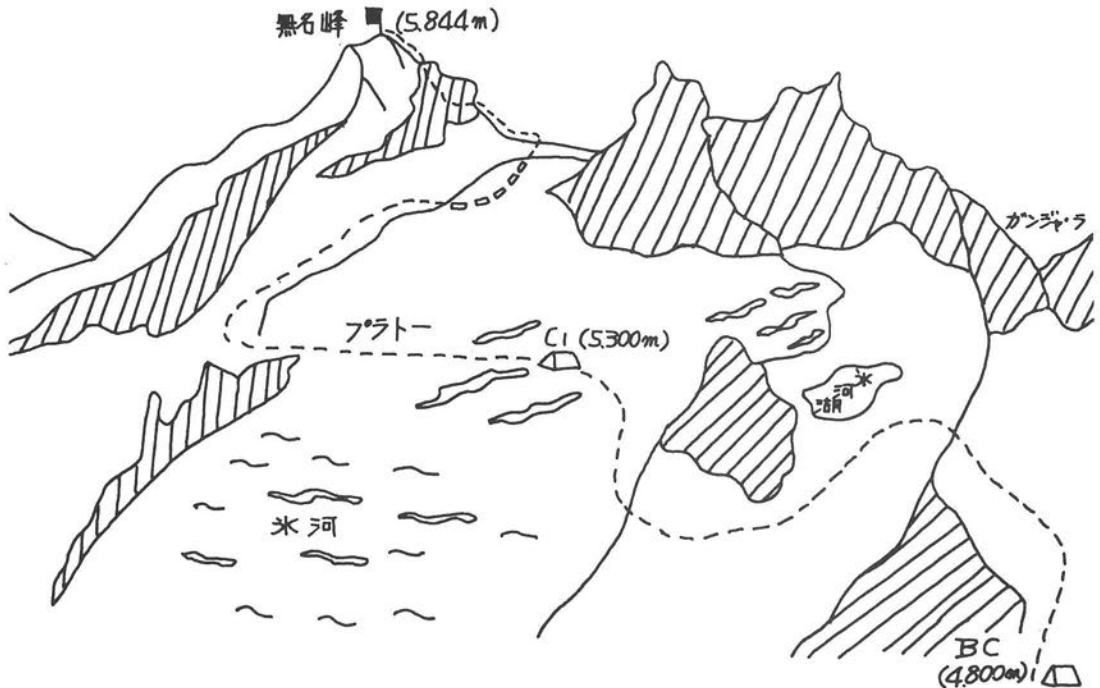


◀C1より無名峰(5844m)を望む

カトマンズに足止めされてしまい、出発時の心配が本当になってしまった。隊員の休暇等の事もあり、目標の山の変更を余儀無くされてしまった。私達は、登山をあきらめてトレッキングだけにするか、他に目標を変えるか急拠検討にはいり、全員一致で目標をランタンヒマールのガンジャラ・チュリ(5,846m)に変える事を決定した。

アプローチ

ランタンヒマールへは、カトマンズ市内から車





でトリスリバザールかベトラワチまで行く事ができ、トリスリバザールへの途中、標高1,835 mの峠附近(カカニの丘)からは、ジュガル・ランタン・ガネッシュ山群、更にマナスル3山の山を見る事ができる。トリスリまでは定期便も出ている。そこから、トリスリコーラを逆登って、ラムチェ、ドゥンチェ、シャブルまでゆき、ここからランタン谷に入り、ラモーテ、ランタン、ギャンジゴンパと6~7日間でゆくの、いちばんポヒュラーな方法であろう。各間は6~7時間でゆける。ドゥンチェからシャブルベンシ経由でも行けるし、シャブルベンシ、ゴラタベラ、ランタンへはヘリコプターでもゆけるし、直接ギャンジゴンパまで飛行機で行く事もできる。しかし、いずれもチャーターが必要で、多額のチャーター料も考えなければならない。又、高度障害の事も考えねばならないだろう。ギャンジゴンパは標高3,885 mある。私達は7日間をかけて、ギャンジゴンパまで行ったわけだが、道も景色もすばらしく、楽しいトレッキングを十分に楽しむ事ができた。

ル ー ト

ギャンジゴンパに着いた日に、タルチョーのはためく峰に、高度順応の為に登る。1時間15分で頂上に、高度は4,350 mを示している。BC建設の為にガンジャ・ラパスへの道を登る。コーラを渡り、しゃくなげやダケカンパの樹林帯をすぎると2軒のカルカが見えてくる。ここがナヤカルカ(約4,300 m)だ。この辺から雪がうっすらと

見えはじめる。翌日更に高度をあげ、バスまであと少しという台地にBC(約4,800 m)を建設する。右前方にナヤ・カンガ(5,846 m)を見ながら、モレーンの道を登り、バスが見えるあたりから左の雪と岩のミックスした壁に取りつく。中途半端の為歩きにくい。斜面の上に出ると、私達の目ざす山が白い尾根を抱いてそびえている。目の下には緑色に輝く氷河湖が美しい。回りの景色のすばらしさとは別に、私達の体は重くなってゆく。斜面がきつくなった所で、アイゼンをつけ、スタックで凍った斜面を登りきると、大きなプラトールに出る。このプラトールが目標の山に続いている。広いプラトールには、大きな口をあけたクレバスがいくつもあり、アンザイレンのまま進み、プラトールのほぼ中ほどにC1(約5,300 m)を建設する。頂上へのルートは2つ考えられる。北東に伸びる尾根と、西に伸びる尾根である。この西稜はガンジャ・ラパスへと続いている。私達はこの西稜に取りつく、プラトールを頂上直下まで進み、更に右の広い斜面を登り、大きなクレバスの間にかかる巾1 m位のスノーブリッジをやっとの事で越え、50°~60°はあろうと雪と氷のミックスした壁にとりつき、西稜の上に出る。西稜は両側がスッパリと切れ落ち、またいで進みたい位だ。雪をしっかりと踏締めて、稜線上を慎重に進み、2つの大きな岩稜を登ると、あとは頂上につながる雪稜が続いていた。11月3日、全員登頂はならなかったものの、女性2名を含む4名とシェルパ1名が憧れのヒマラヤの山頂に立った。

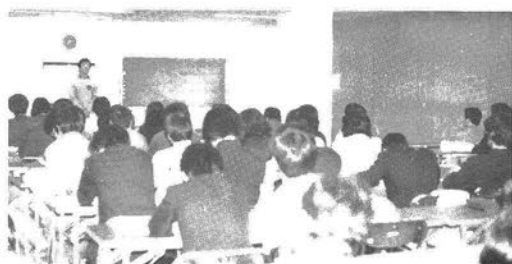
終りに

私達は、現地事情によりやむなく目標を変え、幸運にも、憧れのヒマラヤのピークを踏む事ができた。しかし、ランタンヒマールの研究不足の為私達の登った山は、ガンジャラ・チュリ(5,846 m)でなく、無名峰(5,844 m)であったようだ。ガンジャ・ラパスの右手に位置する、ナヤ・カンガの別称がガンジャラ・チュリである事を私達は帰国後の調査で知ったわけです。シェルパに聞くとどれも、ガンジャラ・チュリだと言っていたが、私達は、この無名峰をガンジャラ・リと呼ぶことにしている。(文責：桜井 修)

'80登山学校報告会開催さる

さる11月27日(木)午後6時30分より東京渋谷の岸記念体育会館にて今年度の登山学校の報告会が開催された。隊の概要については先月号の特集のとおりだが、19名の大量登頂を果たしたこともあってか、会場には多勢の参加者があふれ、活気のある報告会となった。

山森事務局長のあいさつのもと、尾形好雄隊長から登山活動の報告があり、つづいて8ミリの映写を行なった。これは新郷信広隊員の製作によるもので、セミプロ級のすばらしいできばえに大きな拍手がおくられた。このあと職業カメラマンである遠藤喜重郎隊員のスライドも映写された。これもすばらしい写真であった。閉会は午後8時45分。参加者60名。



寸 感

▶高まる一方のヒマラヤ遠征熱は、81年を迎えてまた一段と飛躍しそうな勢いです。あのお金のかかる中国へなんと10隊。そして8,000mへ行く行く隊も10隊を数えます。私自身熱にうかされた一人ですから、共鳴できないことはありませんが、しかしお金のほうは一体どうなっているのでしょうか。トータルして考えてみると、これほど非生産的な行為にこれほどお金をかけている人種も見あたりません。こんなことを考えながら新年にあたって「お金の特集」を組んでみました。

(F)

事務局日誌 (11月)

- 2(日)~3(月) 日本ヒマラヤ会議(前橋)、群馬県山岳連盟と共催
カンチェンジュンガ隊々荷予備梱包
- 8(土)~10(月) カンチェンジュンガ隊々荷梱包
- 10(月) 「ヒマラヤ」12月号刊
- 11(火) 「ヒマラヤ」12月号発送
- 12(水) 吉尾弘氏インタビュー(於労山事務所)
- 16(日) 日本ヒマラヤ会議(大町)
- 27(木) '80登山学校ケダルナート隊報告会(於岸記念体育館)

洋山岳書古書・新書 通信販売

○取換書—世界全域山岳・探検・紀行・報告書

●探求書がございましたらお知らせ下さい。探します。

●洋山岳書でご用済のものがございましたらお譲り下さい。誠実評価

カタログご希望の方は、郵券¥200分同封ご請求下さい。

〒151 東京都渋谷区代々木
1-21-9

ヒマラヤNo.110 (1月号)

昭和55年12月10日印刷 56年1月1日発行

発行人 柴田金之助

編集人 角田不二

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

電話 03-367-8521

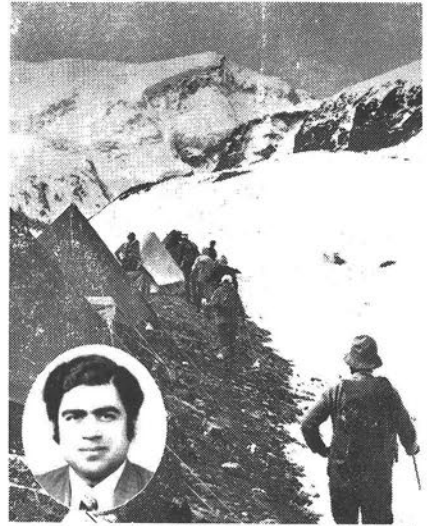
郵便振替 東京0-48954「日本ヒマラヤ協会」

Shikhar Travels

— シカール・トラベル —

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール……
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



全世界のネットワーク

AFIA ホーム 保険会社

海外 山岳 保険

取扱代理店

郷インシュランス・コンサルタント

[ホーム保険会社代理店]

〒100 千代田区丸ノ内3-1-11

国際ビル8F

TEL. 03-281-2981

相談所

ホーム保険会社首都圏支店

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-211-4401

担当：寄木康男

ヒマラヤへの装備



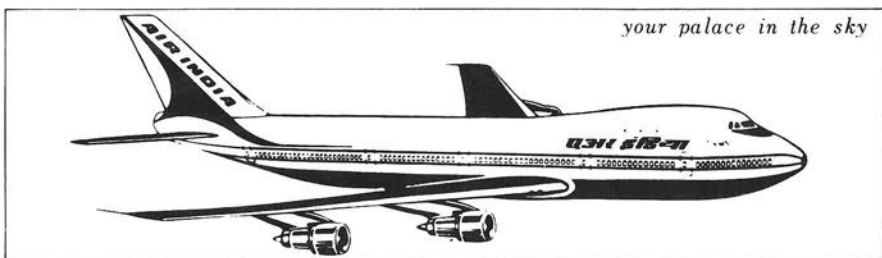
◎遠征隊の装備、相談にのります。



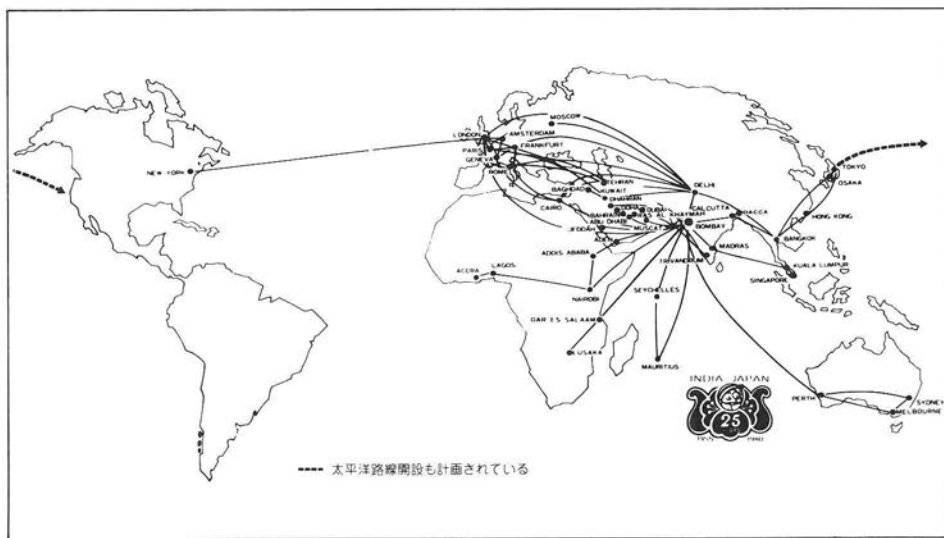
ICI 石井スポーツ

至 中野	至 池袋	ICI 山用品本店 ICI テニス用品	至 池袋
大久保駅	新大久保駅	ICI スキー用品 本屋 大久保通り	明 通 り
至 新宿	至 新宿	ICI サッカー・野球用品	至 西 松 明 通 り

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の耕井 (HAJ会員) まで、お問い合わせ下さい。

名古屋 ● 中村区名駅四丁目 7-35 ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450 ☎ (052) 583-0747

世界の43都市をネットする
エア・インディア

- 東京 ● 千代田区有楽町日比谷パークビル 〒100 ☎ (03) 214-7631
- 横浜 ● 中区常盤 1-2 関内日本ビル 〒231 ☎ (045) 651-2874
- 大阪 ● 東区備後町松豊ビル 〒541 ☎ (06) 264-1781
- 神戸 ● 葺合区布引 2-1-3 新布引ビル 〒651 ☎ (078) 222-1919
- 福岡 ● 博多区博多駅前 1-3-21 八重州ビル 〒812 ☎ (092) 471-7172